

令和7年度第4回京都市市民参加推進フォーラム会議 摘録

【開催日時】

令和7年11月21日（金）午前10時～午前12時

【開催場所】

京都市役所分庁舎4階 第4会議室

【議 題】

- (1) 次期京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン(以下、「次期ビジョン」という)の策定について
- (2) 次期ビジョンのパブリック・コメントの実施について

【出席者】

12名

(乾座長、並木副座長、荒木委員、今里委員、岡田委員、竹田委員、千葉委員、中嶋委員、西澤委員、平井委員、水本委員、森田委員)

※水本委員はオンライン参加

【議事内容】

1 開 会

(局長あいさつ)

2 議 題

(1) 次期ビジョン等の策定について

<事務局>

(資料1に基づき説明)及び(白水副座長からの意見の紹介)

<荒木委員>

資料を読んだ印象として、非常に良いビジョンだと感じている。今後、詳細を改善していくと思うが、これをいかに実際の政策に活かすかが重要であり、現行施策の取捨選択を行い、より芯を突いた政策を増やして実行できるかどうかを焦点だと考えている。来年度以降は、フォーラムとしても、その提案やモニタリングが重要な仕事になると思う。

ビジョンの「まち柄」の部分について、番組小学校や学区のこと、小・中・高校において、地元住民の教育参加や学校側の地域理解が進んでいること、京都市民の約1割が学生であり、市民活動・地域活動に関わり続けていることなどは、京都特有の強みであり、短くても盛り込んでどうか。

<西澤委員>

ビジョンは、これまでの議論が非常に分かりやすくまとめられている。

気になった点は「ICT」という単語で、最近はあまり聞かない印象がある。メールやSNS、生成AIなども含んだ言葉かと思うし、また行政で使うのに適した表現かもしれないが、別の表現があれば変更した方がわかりやすいのではないか。

また、パブリック・コメントの募集に当たっては、冊子だけでなく、例えば、生成AIを活用し、2人のキャラクター同士が対話形式で説明を行うようなものを利用してビジョンの内

容の解説等をする事で、より多くの市民に参加してもらえないか。

<乾座長>

「ICT」の代わりに「デジタルツール」などの表現も考えられる。

生成 AI を使えば、アナウンサーと解説者のような音声形式のものが生成できる。これは、ビジョンを読み込ませるだけで、高いクオリティのものができる。こうした形式での発信も考えられる。

過去には漫画で市政参加を呼びかけたこともあったが、今は音声・動画など多様な方法でアプローチできる。

<今里委員>

このビジョンは最終的にどのように公表されるのか。冊子になるのか。

<事務局>

最終的には冊子にする予定である。ビジョンは、この会議では横向きで提示しているが、冊子は縦型レイアウトに組み替えて公表する。ホームページにも縦型で掲載する予定である。

<今里委員>

前回資料では「目指す姿」と施策の関係が分かりやすい構成だったが、今回の資料では、7ページに目指す姿、8ページ以降に施策が個別に並び、全体の関係性が見えにくい。

<事務局>

前回の資料では、目指す姿「つながる・支える・創り合う」ごとに、施策の方向性を記載するといった構成にしていたが、「つながる・支える・創り合う」はそれぞれに関係しており、明確に区切るのは難しいという意見があった。これを踏まえ、大きな図で全体像を示し、施策は「つながる・支える・創り合う」の複数に跨るものではあるが、一番近いところに配置する構成とした。

<乾座長>

全体像と要素分解の関係は、要素を細かくすると全体が見えにくくなるという問題がある。このビジョンでは、目指す姿は生態系のような構造であり、施策は例示的な位置づけである。

<千葉委員>

ビジョンの「まち柄」のページの写真が、他都市にもありそうなものであり、京都らしい写真を入れてはどうか。例えば、門掃きの様子や地蔵盆のように地域のつながりが感じられる場面などが適しているのではないか。

<乾座長>

京都市に、こうした写真のストックがどれほどあるかは分からないが、京都らしさを伝える写真は重要である。記録写真ではなく、意図が伝わる写真を選ぶ必要がある。

<平井委員>

全体として、取組の先にある「楽しさ」が文章からあまり感じられない。義務感やボランティア精神への期待の方が強く見え、参加のハードルが高く感じられる。

市民が参加することで得られるメリットが明示されると良い。例えば、防災面でのメリットは分かりやすい。災害が起こった際に行政サービスだけでは対応が難しい場面があり、地域のつながりが強いほど助け合いが進む。防災は市民が「自分事」として捉えやすいはずである。

また、パブリック・コメントは批判を述べるだけの場になりがちだが、「応援」や「共感」

が得られやすい問いかけにすると良い。

<乾座長>

義務感ではなく、自発的に関わるためのワクワク感をどう醸成するかが重要である。ウェルビーイングを高める方向性を示しながら、防災などの分野がもつ“自分事化しやすさ”も活かす必要がある。

デザインの力も重要であり、現行計画の時に実施した、芸大生と一緒にビジョンの解説動画を作ることも考えられる。

<並木副座長>

3つの要素からだけでは、目指す姿のイメージが十分に伝わりにくいと感じる。

デザインや見せ方を工夫し、今困っている人が少し楽になったり、日常が楽しくなったりする具体的な場面が見えるように表現したい。

また、目指す姿に到達するための道筋がイメージできることも重要である。自治会などの人がこの資料を見たとき、「自分たちは今ここにいるから次はここを目指そう」という段階が分かると良い。すでに進んでいる地域であれば、次のステップが見えるようにしたい。

施策についても、目指す姿に向かうための「アプローチ」であると示せば、取り組む人のエネルギーを高められるのではないかと思う。

<乾座長>

プロセスをどう表現するかは難しいが、「つながる・支え合う・創り合う」は互いに連動しており、分解すると「成立→展開→創造」にも近い構造になる。それらが循環するイメージを描きながら、目指す姿に向かう具体的なステップを示すことができれば理想である。

<荒木委員>

「施策」という言葉はどうしても主体を行政に寄せてしまう。第3章のタイトルは「アプローチ及び推進例」などにしても良いのではないか。市民が主体的に始めるものが主役になることが分かる表現が望ましい。

<乾座長>

市民と行政が共に進める例として提示すべきあり、アプローチという表現は良いかもしれない。

<今里委員>

施策の主語はどうか。行政なのか、市民なのか、統一した方が良いのではないか。

<事務局>

施策は、冒頭文にも記載しているように、市民と行政が一緒になって進めていくものを基本として記載しており、行政と市民の両方が主語になるものである。当然、このビジョンは、行政計画であるため、行政がしっかりと関わることが前提となると考えている。

<乾座長>

「関係」を主軸に考えるべきだと思う。市民、行政、地域の3者が別個ではなく、常に関わる前提とする必要がある。市民、行政、地域のいずれもが主体となるため、施策の主語も一方に固定せず、3者が関係できる表現とするのが良い。

<並木副座長>

それであれば、「施策」を「アプローチ」に置き換えてはどうか。

<乾座長>

「施策」とすると行政が責任を持って実施する印象になり、ビジョンの趣旨とずれてしまう。このビジョンにおいては、「アプローチ」の方が適していると感じる。

<事務局>

行政が策定するビジョンであるため、行政がしっかりと関わることを前提としつつ、「市民と一緒に進めていく」ことを明記している。目指す姿へ向かっていくプロセスを重視することを示す点からも、「アプローチ」という表現は良いと思う。

<中嶋委員>

全体として非常にいいビジョンであると感じた。

そのうえで、1点目として、市民が享受できるメリットを提示することが必要である。ビジョンの目指す姿には共感するが、「市民にとってどんな良いことがあるのか」が読み手に伝わりにくい。例えば、防災は具体的なメリットが見えやすく、強調する価値があると思う。先日の大分の火災のように、木造密集市街地や空き家問題は京都でも起こり得る。市民同士のつながりは、防災の観点からも重要であり、まとまりやすいテーマではないか。

2点目として、パブリック・コメントの意見聴取について、目指す姿と施策を分けて意見を求めるのか、それとも全体への意見を求めるのか。

<事務局>

確定しているわけではないが、全体への意見と、目指す姿や施策といった個別の項目への意見の両方を記載する欄を設けることを考えている。その方が、意見を出しやすいと考えている。

<中嶋委員>

項目を分けて尋ねる形式に賛成である。全体について一度に尋ねられると、どこに意見を書けばよいのかわかりにくい。また、資料を十分に読まずに不満だけを書いてしまいかねない。

<乾座長>

パブリック・コメントを対話型で実施する方法もある。

<今里委員>

「つながる・支え合う・創り合う」が実現した時の具体的な姿を絵で示すことができれば、市民もイメージしやすくなる。例えば、防災ならこんな形になるというわかりやすい絵があると良い。

<乾座長>

防災など、「つながる・支え合う・創り合う」が実現した状態がわかるイメージの例示は、ありがたい姿を視覚的に理解するために有効であり、検討する価値がある。

<西澤委員>

関連になるが、このビジョンを読んで今まで参加してこなかった市民が参加したいと思えるか、また前回の対話に参加されていた市民参加の推進を頑張っている方々が、これを見てさらに推進したいと思えるか、そういった点も必要だと思う。その意味で色々な立場の方が自分はどの立場にいるのか、どういった施策を見ればよいのかをイメージ図で見せられるとさらに良いと思う。

<竹田委員>

ビジョンに記載されていることの抽象度が高いと、自分から遠いものを感じてしまう。前回の会議でも議論があったが、例えば、留学生や山間部といった、意識してビジョンを注視しないと自分ごとを感じない人たちのことを念頭に置いて、具体的なイメージが入れられると良い。全体的によくまとまっていると思うが、その1点工夫があると良いと思う。

もう1点は確認である。資料集の「世帯の状況」は総務省の調査を引用しているが、これは、京都市の状況なのか、国全体の状況なのか。ここに掲載するのであれば、京都市の状況がわかる方が望ましい。また、平成27年度と令和2年度とを比較すると、あまり差がないような印象を受ける。もう少しさかのぼったデータと比較するなど、実態がわかりやすくなると思う。

また、同じ資料集の「社会参加の状況」について、健康づくりの分野で社会活動の参加率の低下が示されており、回答者は40代以上が半数ほどであり、令和元年より社会活動の参加率が下がっているという点には驚いた。コロナ禍で社会活動が落ち込んだのは実感としてある一方で、その後、活動がかなり活発になっているという肌感覚もある。学校などでどんどん外に出ていく動きも含めて、社会活動自体はかなり多様になっていると感じている。その中で、このビジョンを読んだ方が、パブリック・コメントの際に自分事化できるような問いの立て方ができるとよいと思った。

<乾座長>

世帯の状況のデータが、国全体のものか京都市のものなのかは確認しておいていただきたい。また、令和2年と比較するのは、平成モデル期のものと比較するのが良いと思う。平成27年だと、ほぼ令和と変わらない印象がある。

社会参加の状況については、右肩上がりに戻ってきているという肌感覚を持っている人もいると思う。令和元年と令和5年を比較すると下っているが、コロナ後に回復傾向にあるとも読み取れる。どのように読み取るかは整理が必要ではないか。「低下が続いている」と書くと、今もなお続いているように見えるが、実態としてはどうか。事実の表現とトレンドの捉え方は慎重に検討した方が良い。

この社会活動への参加のデータについては、審議会の事務局にもフォーラムでの意見を伝えていただき、整理してもらった方が良い。資料として公表される以上、その前提をきちんと押さえておいてもらいたい。

<並木副座長>

4ページで、市政やまちづくり活動への参加の裾野が広がっていると書かれている一方で、資料集では、社会活動への参加率が減っていると記載されており、メッセージが食い違っている。メッセージを統一できると良い。

<岡田委員>

これからビジョンを発信し、活動を広げていく中で、最終的な成果目標として市民に参加してもらうことはもちろん重要だが、行政として「どれだけ参加の場を設けられたか」も重要な指標になると思う。

社会活動への参加の場として、自治会・町内会・PTAなど、団体に紐づいた場が多く、行政が十分にコミットできていない面もある。最終的な成果目標として、市民参加の数の評価だけでなく、行政がどれだけ場を提供できたかも併せて評価することを意識してはどうか。

<乾座長>

成果目標の話が出たが、ビジョンなので、直接的には数値目標は置かない。一方で、「推進状況の確認」という項目があり、モニタリングの話が出ている。以前、このフォーラムでも、ロジックモデルの話も出ていたが、このビジョンと政策をどうつなぐか、ロジックモデルの観点から並木副座長にコメントをもらいたい。

<並木副座長>

昨年、フォーラムでロジックモデルを使つての評価に取り組んだ。ただ、今年度については、議論の対象が計画ではなくビジョンであるため、評価ツールとしてのロジックモデルは必須ではない。ただ、ビジョンであっても、各区が施策を展開したり、それがどれだけ進んでいるのかは、アンケート等によってモニタリングする必要がある。現在議論しているビジョンには、アプローチやイメージは示されているが、目指す姿に向かっているかどうかを確認する方法の一例として、ロジックモデルを後半の資料集に記載する、もしくは成功している市の取組の事例を、市民の皆さんが使える道具箱のような形で載せても良いかもしれない。

<乾座長>

昨年度のフォーラムに参加されていた皆さんは、市民参加推進計画をロジックモデルで評価する取組に参加してもらっていた。この取組は、委員の皆さんの負担も大きかったと思う。

今年度議論しているのは、計画ではなくビジョンであるので、計画のような政策評価は行わないと考えている。

一方で、このビジョンに基づき、各区や取組の主体者が、まちづくり運営方針の策定や施策を展開する中で、その進捗をモニタリングしたいというニーズは出てくると思う。「推進状況の確認」としてアンケートでモニタリングすることは書かれているが、「自分たちがビジョンに向かって進めているか」を確認する道具として、ロジックモデルを例として示すことはできるのではないか。

すでに成功しているまちづくりの取組をロジックモデルで見せることにより、「こういうステップを踏めば目指す姿に到達できる」という道筋をイメージできる。各自治会や区の皆さんが使える「道具箱」として提示することは有効である。

ロジックモデルは、評価のためだけでなく、目指す姿を自分たちで描き、そのためのマイルストーンやプロセスを自分たちで考えるための道具でもある。どのようなデータを取っておけばよいかも自分たちで考え、主体的に回していくためのフレームである。

目指すべきゴールと、自分たちの取組や成果が論理的につながっているかを確認しながら、モニタリングして前に進めていく。昨年、このフォーラムでも試行的に行ったが、今回議論しているのはビジョンであり、各区役所や本庁やそれらと連携して取り組む主体者が、このビジョンをどう受け取って、どう動いていくかが重要になる。

施策の例も参考にしながら、「こんなことをやってみよう」と考えてもらう。その際に、やりっぱなしではなく、予算も含めて、どう進め、どうモニタリングするかを検討するための1つの方法としてロジックモデルや道具箱のような形をこちらから提示することも検討したい。

<並木副座長>

2014年に京都市が「客観指標の設定マニュアル」を公開しており、その中にもロジックモデルの説明がある。そういった既存資料を紹介する形も考えられると思う。

<乾座長>

ロジックモデルは既に紹介されているが、十分には浸透していない。今後、施策の取捨選択や優先順位づけがますます重要になる中で、ロジックモデルは分かりやすく使いやすいモデルだと思う。ぜひ活用してほしい。

<森田委員>

自分がパブリック・コメントをする立場で考えた時に、施策、推進体制、区役所の役割などの項目のうち、「どこを意識して読んで欲しいか」が分かると回答しやすい。あまり誘導的になってはいけないと思うが、「自由にご意見を」とだけ言われるよりも、「こういう点についてどう思うか」といった聞き方であると、考えやすくなるのではないかと。

<乾座長>

観点を明確にして問うことは重要だと思う。全体について書きたい人は全体について、特定の部分だけ書きたい人はその部分だけでもよい、という受け止め方ができるようにするのも1つの方法である。また、誰に向けて読んでもらうのかというペルソナを考え、その人にはどのようなアプローチがよいかを検討することも今後の課題だと思う。観点別のコメントの取り方も検討していきたい。

<水本委員>

資料集のまちづくり活動への参加の有無を聴く設問に対する、「参加していない」と答えた10代～30代の割合が大きいという記述は事実であるが、10代～30代が強くフォーカスされていて責められているように感じる人もいると思う。また、「10代～30代が参加していない」と言われているように受け取って、「それならもう参加しない」という反応につながる可能性もある。

書き方として、「もっと参加してくれたらいいな」というニュアンスで書くほうがよいと思う。事実であるからこそ強く刺さる一方で、責められていると感じてしまうこともあるので、柔らかい表現にするか、そもそも書かないかの検討があつてよい。

<並木副座長>

全体を通じて皆さんに聞いてみたいのは、言葉のチョイスの問題である。7ページなどは市民活動をしている方々の言葉から作られているので非常に読みやすく、受け止めやすい。一方で、施策の部分に行くと急に難しくなる印象がある。

基本構想にも書いてある言葉で、「学藝衆」が何度も出てきたり、「学び縁」のような表現も、知らない人には分かりにくい。

内部向けの資料として記載する分には問題ないが、パブリック・コメントで市民が読む部分には、もう少し柔らかい言葉を使ってもよいのではないかと思う。例えば、施策3は「ゲーム性を持たせた取り組み」など楽しそうな内容も書かれているが、その手前に「学藝」が出てくると、そこで止まってしまうのではないかと。

<乾座長>

施策の文章が「推進します」という述語になっているため、今里委員が言うように「主語は誰か」という問題が生じる。「推進します」という言い方が良いのか、「～を目指す」のような表現にするのか、施策部分の書き方は見直してもよいかもしれない。

<水本委員>

ビジョンの 簡単バージョンが必要だと思う。参加してほしい世代が若い世代であることを考えると、こんな長い文章を一気に読む人は、もともと市民活動に参加しているような人

に限られると思う。

<乾座長>

市民から見たときに分からない表現になっているのは問題であり、ユニバーサルデザインを意味するUDも同様である。

読み手が行政職員であれば「0.1 市民 / 0.1 職員」「学藝」は通じるかもしれないが、市民参加を考えると、市民に向けてどう翻訳するかが求められる。

(2) 次期ビジョンのパブリック・コメントの実施について

<事務局>

(資料2に基づき説明)

<乾座長>

パブリック・コメントの方法について、ショート動画や簡易版の作成なども含め、意見があれば出してほしい。

<事務局>

先ほど話に出た「簡易版」について、当初はパブコメに合わせて概要版を作成することを考えていた。前回の会議で、大学生のコンペなどで概要版を作ってはどうかという意見ももらい、それが非常によいと感じた。ただ、今のタイミングでコンペを行うとパブコメ開始に間に合わないため、今年度は概要版の作成を見送る。来年度、学生を対象としたコンペ形式で、A3両面程度の分かりやすい概要版を作り、このビジョンの普及につなげる取組を進めていきたい。

<乾座長>

正式な概要版は来年度以降にするとしても、生成AIを使って対話形式のコンテンツを作ったり、音声付きの短い動画を作成したりすることは可能ではないか。

<並木副座長>

パブコメの「対話型」のイメージを確認したい。事務局が出向き、対話型で実施することであるが、具体的にどのような形を想定しているのか。

<事務局>

方法等は、場に応じて相談しながら決めたい。こちらから説明をして、最後に意見を書いてもらう形もあれば、問題提起をしてグループワークを行い、その中で意見を書いてもらうやり方もある。委員の皆さんに協力をお願いする場合は、事前にすり合わせをして、その場に合ったやり方で実施したい。

<平井委員>

対話型といいつつ、最後は紙に書いて提出してもらう必要があるという理解でよいか。

<事務局>

基本的には、その場で記入して提出してもらう形にしたい。これまでから、口頭だけで「意見として受け付ける」という取り扱いはしていない。

<並木副座長>

書面をワークシート形式にして、シートに記入したものをもとに発言し、そのまま提出してもらう形も考えられる。

<乾座長>

現行計画のパブコメの時は、大学の授業で対話型パブコメを実施した。その時は、授業で計画の説明をした後、その日の課題を「計画について、意見や感じたこと」として、提出された意見等をそのまま行政に渡すようなやり方をした。このようなやり方も考えられるし、構造化インタビューのような形で、対話と書面提出をセットにするなど、方法は色々考えられる。

対話型の場でどの程度書面提出を求めるか、人数や対象によって柔軟に考える必要がある。特に10～30代にアプローチしたいので、その世代が参加しやすい場、方法を検討したい。

<竹田委員>

「ユースカウンシル京都」という団体のメンバーが、前回の計画策定ときに対話型パブコメを経験しており、今回もぜひやりたいと言ってくれている。

そのときはパブリック・コメント普及協会の方にも来てもらっていた。行政からの話を子どもや若者が直接聞く機会はなかなかないので、今回もぜひ来てもらいたい。計画自体を見るのが初めてのメンバーも多いと思うので、こうした計画があることや、それが自分たちとどうつながっているかを一緒に考え、自分事化していくプロセスを持ちたいと思っている。

<平井委員>

かつて若者会議U35で、「パブコメ隊」という仕組みがあり、繁華街などに机を出して資料を配り、「パブコメくん」の着ぐるみでパブコメを呼びかけるなど、市民参加を促す取組をしていた。

<乾座長>

ゼミの授業として扱ってもらうことや、公共系のゼミでパブコメをテーマに授業として取り上げてもらうことは、今からでも考えられる。イベント的な形にしていく発想も重要だと思う。

選挙期間には、学生団体「Mielka」などが選挙啓発をしている。そうした団体と連携し、選挙ではないが市政参加の一部としてパブコメを扱い、高校などに出向いて主権者教育の一環として実施する方法もあり得る。自分自身も高校などに働きかけて、何かできないか聞いてみたい。

ただし、今回の実施期間（12月25日～2月2日）は、大学が冬期休暇や試験期間に入る時期と重なっている。学生にアプローチしにくい時期設定になっており、本来はもっと学生が動きやすい時期に実施できると良い。

<竹田委員>

このビジョンは、市民参加のハードルを高く感じている人や、そもそも縁のない人たちにもアプローチするチャンスだと思う。働いていない人や山間部、留学生など、これまで話題に上がった人たちにどうアプローチするかを意識したい。人数が少なくてもいいので、そうした層へのアプローチを、この限られた時間の中でどう工夫できるかを考えていきたい。

3 閉会

<事務局>

以上をもって、令和7年度第4回京都市市民参加推進フォーラム会議を終了する。

以上